

【書評】

市岡卓著『シンガポールのムスリム——宗教の管理と社会的包摂・排除』
(明石書店、2018年)

田村慶子

著者の市岡卓（いちおか たかし）氏は1988年から2011年まで運輸省（現在の国土交通省）勤務、うち2004年から07年まで社団法人日本海難防止協会シンガポール事務所長を務めていたときにシンガポールの文化と社会に関心を持ち、法政大学大学院国際文化研究科に入学、博士（国際文化）の学位を取得するという異色の経歴を持つ。本書は著者が同研究科に提出した博士論文を改稿したものである。

本書が研究対象とするのは、シンガポールの人口の14%を占めるムスリムである。ムスリムの83.9%はマレー人で、インド人は12.5%、その他は華人1.9%などである。なお、マレー人（人口比では13.3%）の99%以上はムスリムで、インド人（人口比では9.1%）では21.3%、華人（人口比74.3%）のムスリムはわずか0.3%で、その他に少数のアラブ人ムスリムもいる。

シンガポール政府は、すべての民族・宗教を平等に扱う多人種主義と、国民を能力に応じて公正に登用するメリトクラシー（能力主義）を掲げるが、これらは結果の平等を保証してはいない。シンガポール政府による広範なムスリム支援策が実施されているにもかかわらず、ムスリム社会の大部分を占めるマレー人は、教育、所得、職業のすべての面で他のエスニック・グループとの大きな格差に直面している。

本書は、なぜマレー人が大きな格差に直面し、マレー人を含むムスリム全体も差別に晒されるなど様々な問題が存在するのかに注目し、ムスリム社会のリーダーたちがどのようにそれらの問題に対処しているのかを政治社会学的観点から分析することで、ムスリムの「包摂」と「排除」のメカニズムを明らかにすること、さらに、シンガポールがムスリムにとってより包摂的な社会となるための課題を提示することを目的とする。

I 本書の構成と概要

本書の構成は以下の通りである。

序章

第I部 シンガポールの多人種主義とムスリムをとりまく状況

第1章 シンガポールの多人種主義

第2章	シンガポールのムスリムをとりまく状況
第II部	社会的格差、差別、ムスリムとしてのアイデンティティに関わる問題
第3章	社会的格差と差別
第4章	ヒジャブに対する規制と差別
第5章	イスラームの教育・普及をめぐる問題
第III部	過激主義への対応に関わる問題
第6章	過激主義防止対策をめぐる問題
第7章	宗教間の交流と「過激主義」の言説をめぐる問題
第8章	民族・宗教間の交流・対話と相互理解をめぐる問題
終章	

序章では、研究の目的、研究の視点、先行研究、研究の手法や研究の意義などが述べられている。

第I部第1章では、多人種主義によるエスニシティと宗教の管理は、民族・宗教間の融和と社会的統合のための政策である一方で、エスニック・グループ間の境界を固定化し、多様なエスニシティ・宗教間の差異を抑制する。つまり包摂と排除が一体であると分析し、さらに、多人種主義の課題を、民族・宗教間融和、集団内のマイノリティや低い社会的地位にある集団の包摂、多人種主義そのものの限界という3つの観点から検討している。

第2章では、シンガポールのムスリムの宗教志向と宗教実践の多様性が整理されている。また、ムスリムの宗教実践を支援するための広範な制度は、ムスリムに対して包摂的な面と、国家によるイスラーム管理のための手段としての排除的な面を有することが明らかにされている。

第3章では、マレー人が直面している大きな社会的格差や差別の問題、さらにイスラムフォビアが取り上げられ、マレー人社会の改善のための事業に取り組む自助団体のリーダーたちが政府の財政支援獲得による事業の継続と拡充を優先し、政府に対して異議を唱えることを自制していることが述べられている。

第4章では、ヒジャブの規制がムスリム女性たちの社会進出の機会を狭め、さらにはヒジャブを着ける女性たちへの差別を助長する恐れがあること、しかしながら、ムスリム社会のリーダーたちの中には教育支援を優先し、また非ムスリム側のヒジャブに対するネガティブな視線を意識するがゆえに、規制や差別の問題について異議を唱えることを自制する動きがあることが述べられる。

第5章では、マドラサ（イスラームに関する専門知識を教え、将来の宗教リーダーを育成する私立の教育機関）の教育への政府の関与と、イスラーム関係団体による「穏健なイスラーム」の普及は、ムスリムのシンガポール社会への包摂を進める一方で、宗教への介入であるという反発も生んでいて、ムスリムに対して包摂的ではない面も有していること

が分析されている。

第6章では、ムスリムのリーダーたちが行う宗教リハビリテーション・グループの活動（テロ未遂犯のリハビリや過激主義の予防対策など）が政府のためのものとみなされて反発を生み、ムスリムに対して排除の方向へ働くこともあると指摘する。

第7章では、一部のムスリムがクリスマスの挨拶を忌避する宗教実践を「過激主義」と非難する言説を取り上げ、その非難が宗教への介入かどうかを議論することが、ムスリム社会内部で排除される人を生んでしまう点を指摘する。

第8章では、政府および宗教関係者のイニシャティブによる民族・宗教間の交流や対話の活動がリーダーたちのレベルにとどまっていて、一般市民の交流が必ずしも十分とはいえない可能性があるとは指摘している。

終章では、各章のまとめと結論、さらにシンガポールがムスリムにとって包摂的な社会となる課題として、ムスリムにとっての不利な環境（社会的格差と差別）が変わること、非ムスリムがムスリムの「弱い立場」を理解すること、一般市民のレベルでの民族・宗教間の交流・対話の必要性、ムスリム内部での交流と対話を促進することを提起している。

II 本書の意義

本書の優れた点は、ムスリムの包摂と排除が一体のものであること、つまり、「排除する側」と「排除される側」の単純な二項対立の図式におさまらないことなど、イスラームの管理における包摂と排除の複雑なプロセスを丁寧に分析・解明したことである。

そのために著者（市岡氏）は、文献資料の収集と分析のみならず、ムスリム社会のリーダーたち（政治家、マレー・ムスリム関係団体の役員・幹部職員、宗教指導者、研究者、作家、企業の幹部など）の発言や行動に注目し、ムスリムのリーダーたちを中心とする70名に対して延べ106回のインタビューを行い、加えて、多くのイベントやシンポジウム、講演等の行事に参加して、参与観察を行った。

インタビューと参与観察から見てきたのは、リーダーたちは社会的格差や差別、政府のヒジャブ規制やマドラサに対する管理の問題点、政府が過激主義防止対策のために普及させようとしている「穏健なイスラーム」をめぐる問題などを理解しているものの、ムスリムの学力と社会的地位の向上を優先し、また政府の財政支援を失いたくないことと、「テロの脅威」の下でムスリムが厳しい立場に立たされる状況を避けるために、政府と協力することを選択している。そのために、リーダーが一丸となって異議を唱える状況にならないことが、結果としてムスリムを「弱い立場」に留めてしまう、さらにムスリム社会のなかで排除される人々を生んでしまうと分析している。

また本書は、シンガポールのムスリムの包摂と排除の問題を、シンガポールが標榜する多人種主義の問題の一部としても捉えている。シンガポールの多人種主義は、多様性を社

会の安定に対する脅威とみなし抑制するために、国民を区分（華人、マレー人、インド人、その他）して管理する社会管理の手法でもある。シンガポールのムスリムの包摂と排除の問題から得られる示唆を多人種主義の枠内でとらえることで、多人種主義さらに多文化共生の一般的な課題との関連付けを試みていることも、高く評価できよう。

本書はシンガポールのムスリムに関わる政治・社会問題を包括的・総合的に論じた研究として、日本で最初の研究であろう。東南アジアのムスリムに興味を持つ人のみならず、広く多文化共生に関心がある人にぜひ手にとってもらいたい一冊である。

もっとも、気になる点もいくつかある。第一は、ムスリム社会内部の多様性である。著者は第2章でシンガポールのムスリムにはマレー人ムスリム、インド人ムスリム、アラブ人ムスリムなど多様な人々がいること、さらにその宗教志向性も伝統主義者、復興主義者、リベラルと多様であると述べている。また、インド人ムスリムはマレー人よりも教育水準も所得水準も高いことにも触れている。しかしながら、エスニシティは異なっているにもかかわらず、アイデンティティを共有し、通婚も多く、マレー文化への同化も見られ、「マレー人もインド人ムスリムも協力してムスリム社会全体の改善対策を進めている」（96ページ）と言い切っている。だが、本当にそうなのだろうか。マレー人に比べて所得も教育水準も高いインド人ムスリムはマレー人をどう見ているのか、政府との関係はマレー人とインド人で異なる点はないのかなど、ムスリム社会内の多様性や差異についてもう少し突っ込んだ分析と考察が欲しかった。

第二はジェンダーの視点である。インタビュー対象者70名中、女性は18名、そのうち研究者が9名である。これは著者が男性であるため、研究者という専門職以外のムスリム女性への聞き取りが困難であったことと、そもそもムスリム社会には女性のリーダーがきわめて少ないことが理由であると想像されるが、このような聞き取り対象者の男性偏重について説明が欲しかった。またもし女性リーダーがきわめて少ないとするなら、ムスリムが大きな社会的格差に甘んじ、雇用市場でも差別に直面している状況のなかで、より深刻な差別や格差に直面しているだろうムスリム女性の声は反映されにくい。さらに、もし教育や就職においてムスリム社会内にジェンダー格差があったとしても、女性の声は反映されにくいだろうし、ヒジャブ規制の問題についても男性リーダーの意見で決まってしまう可能性が高いだろう。

本書にジェンダーの視点を求めるのは、「ないものねだり」であろうが、シンガポールのムスリム社会の包摂と排除をジェンダー視点でも捉えてほしかった。この点は、今後の（共同）研究に期待したい。

第三点は、細かいことであるが、本書に挿入されている写真である。本書はシンガポール政府にとって最も触れてほしくないマレー人と他のエスニック・グループの格差や差別の問題、ムスリム社会のリーダーたちと一般ムスリムとの乖離などに言及している。そうであるなら、本書の中に本人が特定できる大きな写真を掲載するのは問題ないのだろうか。

被写体の同意を得ているのだろうか。もし同意を得ていないなら、写真の人物に迷惑をかけるようなことはないのだろうか。研究の成果物に人物が特定できる写真などを使うことに対して、私たち研究者はもう少し慎重になる方がいいように思う。

（たむら・けいこ 北九州市立大学）